①サケの産卵
②栗沢頭首工を遡上するサケ
③遡上中のサケ
④サケの稚魚放流会（令和２年４月４日）
⑤里親に育てられたサケの稚魚
⑥雨煙別川いきもの捕獲・観察会
（令和元年９月14日）
⑦雨煙別川クリーン作戦（同上）

栗山町はサケの稚魚放流、河川清掃、産卵床整備などを通じて「サケの帰ってくる川づくり」を目指しています。

しかし、雨煙別川へのごみの不法投棄が増加していることなど、サケの遡上には多くの課題が残っています。

サケの帰ってくる川には、何が必要なのか。

長年、川の整備に携わってきた専門家・団体に聞きました。

特集　夕張川にサケを帰す
～人と自然との共生に向けて～

命を育み 命が宿る

～ふるさとの川再生への挑戦～

ハサンベツ里山計画実行委員長
夕張川自然再生協議会長
高橋（たかはし） 慎（まこと） さん

私たち栗山町民は「ふるさとの川夕張川」流域の雨煙別川などの水を飲み、米や多くの農作物を生産し、川の恩恵を受けて暮らしています。

「人と自然がなかよく暮らす場づくり」として平成13年に発足したハサンベツ里山計画実行委員会は、たくさんの町の皆さんのご支援をいただき、多くの成果を積み上げ、今年で20年目を迎えます。

ハサンベツ里山はホタルやトンボなどたくさんのいきものが生息する、ふるさと教育の自然体験活動や農林業体験のフィールドとして整備してきましたが、その指針の柱として、「ひとつながりとしての川づくり」を掲げ、より豊かな里山にしていくため、森、小川、池沼、田畑、夕張川、石狩川と日本海をつなぐ水の循環をつくり上げる事業を進めてきました。

ふるさとの川再生のシンボルは「サケの自然回帰」

事業のシンボルとして「サケの自然回帰」を考えました。そのきっかけは、南空知圏の地域づくりを考えていた栗山青年会議所のメンバーが、当時魚道がなかった清幌床止の下流で行っていた南幌小学校の川体験学習を見学した際「サケが清幌床止までのぼってきている」ことを知ったことです。そのメンバーから「栗山や由仁までサケをのぼらせることはできないか」と相談され、江別市在住の流域生態研究所の妹尾優二さんに助言をいただきました。

まず、夕張川の現状を知るために、夕張川フォーラム・シンポジウムを開催しました。平成16年を最初に平成30年まで、毎年、18回も実施してきました。

また、栗山青年会議所を中心にサケ・マスの放流を行いました。平成20年から13年目となり、稚魚の放流数は26万匹に上ります。

平成24年秋には約100尾のサケが栗沢頭首工[注1]下流まで回帰しました。この状況をみて、江別河川事務所が平成27年春、この栗沢頭首工に魚道を設置しました。そして、秋には72年振りに栗山町の川にサケが遡上しました。

夕張川で遡上したサケを確認

流域連携の取り組み

栗沢頭首工への魚道設置はまさに奇跡のような出来事です。当時の国の魚道整備の趣旨は「栗山町には夕張川とかかわる秀逸な市民団体がある。いきもの豊かな川づくりのために魚道を設置する」というものです。

平成23年、「夕張川をもっと豊かでいい川に」提言書を作成したハサンベツ里山計画実行委員会は「治水と利水」に併せて「環境」を盛り込んだ河川法改正の事業推進のための施策である河川協力団体になることを申請し、平成26年に指定されました。

平成24年、雨煙別小学校コカ・コーラ環境ハウスを運営しているNPO法人雨煙別学校は、夕張川流域で小中学生を中心に川体験学習を実施しています。

平成27年には、夕張川流域の自治体・市民をつなぐ受け皿となる役割を果たすべく、夕張川自然再生協議会が発足しました。

雨煙別川の清掃実施とかわまちづくり事業の決定

雨煙別川の清掃は平成24年から始まり、9年目になります。

栗山町は北海道と雨煙別川に関係する団体などで、「雨煙別川かわまちづくり協議会」を設立し、「雨煙別川かわまちづくり計画」を策定しました。平成30年から国の補助事業を活用し、環境整備事業を実施。親水護岸の設置や管理用通路の舗装など、雨煙別川周辺の環境整備が行われています。

注1：頭首工・・・河川などから農業用水を水路に引き込むための施設

夢実現への大きなステップとなるサケ・マスの産卵床づくりへの挑戦

16年をかけた、ふるさとの川再生には、まだ、2つの問題があります。

一つ目は、放流しなくても、サケが自然産卵して世代交代していける川の環境をつくることです。現在、サケは夕張川の小林酒造近くの馬追橋下流の砂洲付近で、主に産卵しています。栗沢頭首工下流や雨煙別川にも産卵しています。ここ数年の調査では約30カ所で産卵床が見つかっていますが、孵化し、浮上した稚魚は見つかっていません。

その理由は湧水が少ないことと、川底に砂利が少なく粘土が多いため、増水すると川の水が濁り、砂利の中に産み付けられた卵が泥で目詰まりし酸欠してしまうことにあると考えられます。

二つ目は、川に投げられるごみの多さです。毎年ごみを清掃していますが、一向に減りません。川に捨てられ、下流に流され、海に漂っているごみは世界的な大問題になっています。ふるさとの川にごみは似合いません。みんなが協力すればこの問題は解決します。

夕張川に投げ捨てられたごみ

サケは放流した川に戻る

里親の皆さんやオオムラサキ館の皆さんの協力で卵から育てられ、放流されたサケの稚魚は、夕張川・石狩川を経て日本海沿岸まで行き、夏にはオホーツク海に入ります。

そこから北太平洋のベーリング湾やアラスカ湾を回遊しながら大きくなり、普通、4年後にふるさとの川である夕張川・雨煙別川に戻り、産卵して一生を終えます。

新しい産卵床づくりに向けて

～雨煙別川でサケの産卵する姿を！～

一般社団法人
流域生態研究所所長
妹尾（せお） 優二（ゆうじ） さん

「雨煙別川でのサケの産卵」は、栗山町民の願いであり、夢でもあります。これをかなえるために毎年サケ稚魚を放流し、回帰を確認しています。また、雨煙別川ではサクラマスも遡上して産卵し、稚魚も少しですが確認できます。しかし、サケの産卵は一部でしか確認されていません。

何故サケは産卵できないのでしょうか？原因は川底の砂利環境や安定した水温環境がないためです。サクラマスは9月下旬から10月中旬に産卵し孵化（ふか）するまでの積算[注2]水温が450℃ほど必要です。サケは10月下旬から11月中旬に産卵し、孵化するまでの積算水温が960℃必要です。川底の砂利が小さいことに加え、雨煙別川には伏流水や湧水（地下水）がほとんどないため水温が低く、サケが孵化できない状況にあります。

サケが産卵する川は、砂利の中に浸透する伏流水や周辺からの湧水が豊富な川です。サケはこうした川に登り産卵する習性があるため、産卵適地整備は、雨煙別川へ登ってくるサケのために川底の砂利を新鮮なものに変え、河原をつくり、川水を浸透させ、河原の下流に湧出させる工夫を行いながら、水温を安定させることを目的に行います。

注2：積算水温・・・産卵してから1日の平均水温を加算した水温の累計

夕張川の活動は、栗山町の明るい未来につながっている

～「ふるさとの自然を次世代へ残したい」から始まった未来志向の地域づくり～

一般社団法人
栗山青年会議所理事長 山本 克幸（やまもと かつゆき）さん

栗山青年会議所では「ふるさとの自然を次世代へ残したい。ふるさとを流れる川に愛着を持ってもらおう」と、平成20年に夕張川にサケを帰す取り組みを始めました。

これまでサケの稚魚放流や河川清掃などを毎年行ってきました。そして、町民運動として行ってきた地道な活動が認められ、平成27年には、サケ遡上の大きなハードルだった夕張川の栗沢地区に位置する栗沢頭首工に魚道が整備され、間違いなくサケは帰ってこられるようになりました。

しかし、サケの産卵場所となる夕張川支流の雨煙別川には多くのごみが不法投棄され、サケが遡上するうえで大きな障害となっています。サケが帰ってきたときに、産卵環境が悪いとそこに産卵しなくなるため、稚魚は増えないことになります。私たちに身近なごみ問題は、私たち自身が解決していかなくてはなりません。今、夕張川へのサケの持続的な回帰に向けて、産卵場所のごみ問題と産卵適地の整備といった産卵環境の改善が求められているのです。

そのために私たちは、地域の皆さんにサケの里親になっていただき、育てた稚魚を放流したり、産卵環境の改善のために河川清掃を行ったり、シンポジウムを開くなど、地域の皆さんに関心を持ってもらうことに力を入れています。

今後はこの取り組みにもっと多くの方に参加していただき、自然環境の大切さや、ふるさとの川の素晴らしさを知ってほしいと考えています。

雨煙別川をきれいな川にするための清掃活動（昨年のようす）

サケの自然産卵への取り組みを未来志向で考える

もうひとつ大事だと思っているのは、子どもたちへの普及活動です。サケを保全する活動は、この先何年もかかるものなので、次世代の子どもたちにも考えてもらう必要があります。

特に自然教育的なメニューの必要性を感じています。夕張川では毎年4月頃にサケの稚魚放流会が行われています。放流体験は、サケという素晴らしい生物に触れられ、自然のことを考える良い機会ですし、サケが元気に泳いで帰ってくる稀有な環境維持に一部でも関わることのできる大事な活動です。

自分たちが放したサケが数年後の夕張川に何をもたらしているか、ということをもっと知ることで、体験活動の重要性はずっと大きくなるのではないかと思います。学校教育カリキュラムでは、地域の自然を学ぶほか、環境問題にかかわりの深いテーマについて教育を実施しています。この「夕張川にサケを帰す」取り組み自体がものすごく有望なテーマだと考えています。

地元の豊かな自然をよく知ることで、これからのことについて自由に発想できて、こうあるべきじゃないか、こうするべきじゃないかということを言えるのではないかと思います。そんな活動に触れた子どもたちが、将来の夕張川やふるさとの自然にどのように向き合っていくのかが楽しみです。

夕張川流域の保全計画

～魚が登りやすい夕張川を目指して～

国土交通省 北海道開発局 札幌開発建設部
江別河川事務所所長
林（はやし） 利行（としゆき）さん

サケは産卵の時などに海から川へ登る性質があります。そこで、夕張川と海をつなぐ川の中を魚が移動しやすくするための取り組みが重要です。

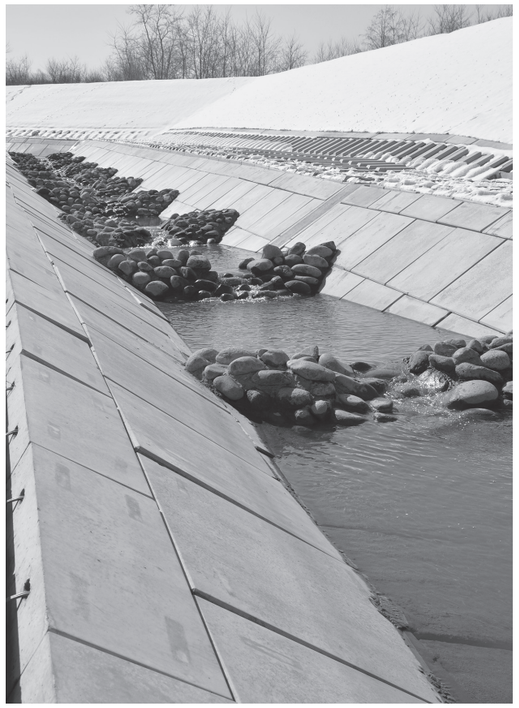
これまでにも清幌床止などの魚道で、地元の方から「魚が川を登れなくて困っている」という連絡をいただき、江別河川事務所では魚の障害になるような木や枝などの除去作業などを行っています。

また、毎年、夕張川や石狩川で行われる河川清掃に江別河川事務所も参加することで、サケにとって住みやすい環境を作れるよう取り組んでいます。

これらの結果、近年の魚類調査では、栗沢頭首工上流においてもサケやサクラマスの生息や産卵床が確認されるようになりました。

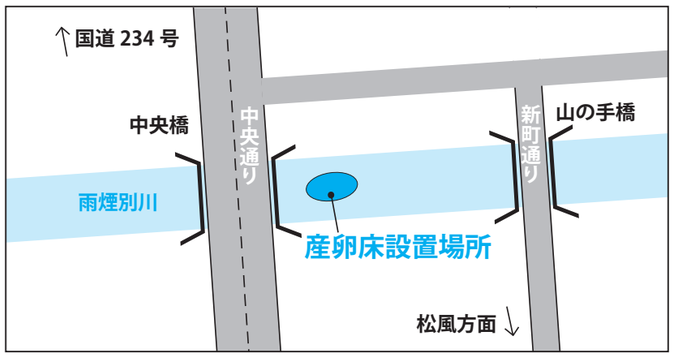
栗山町では、平成20年から継続してサケ稚魚放流が行われています。今後は戻ってきたサケが自然産卵を行うための場所の造成など、サケにとってさらに住みやすい環境の創出が求められます。

栗山町には自然への関心が高い方が多く、これからも河川環境を良くするための活動を通じて、ご意見などを江別河川事務所に伝えていただくことで、今後の夕張川の整備を進めたいと思います。引き続きご協力をお願い申し上げます。



平成 27 年に設置された栗沢頭首工の魚道

サケ産卵床工事を実施

今年は、昨秋産卵床があった中央橋から見える上流の洲のところに、人力で玉石や砂利を投入し、サケ・マスの産卵床づくりに挑戦します。

ふるさとの川創生の市民工事は、田んぼの用水が止まり、雨煙別川の水が減り、サケ・マスの産卵が始まる、9月12日㈯、ごみ清掃と併せて実施する予定です。